胸踊る豊穣な響き

清原 武彦（産業経済新聞社 代表取締役会長）Takehiko Kiyohara

Photo:©尾形正茂

人の生涯の晴れ舞台は時に思いがけない形で現れる。昨年暮、交詢社で慶應OB中心に集まった「音楽と食事の夕べ・中村紘子演奏会」の大トリで中村さんと連弾の席に座ったのは何とこの私だった。

60の手習いで下手丸出しの私が、百人余の聴衆を前に日本を代表する巨匠ピアニストと共演したのだから、「お前もいい度胸をしているな」と友人からは散々、冷やかされた。しかし私に言わせれば、出演をお願いした私に対して「じゃあ一緒に弾きましょうよ」と逆に誘ってくださった中村さんこそいい度胸なのだ。なにしろこれまで中村家名物の「真夏の夜の夢コンサート」（各界の腕自慢演奏家がプロの演奏家と共に出演するホームパーティー）で私の下手なピアノを一番良くご存じなのが紘子さんでいらっしゃるのだから。

というように、素顔の中村紘子さんは茶目っ気いっぱい。しかし、内実は人のことを深く思いやってくださる気配りの人でもある。

さて、その中村紘子さんが今度、ドイツの名門オーケストラ、ドレスデン・フィルとベートーヴェンの「皇帝」を共演なさるという。

実は私はベートーヴェンのピアノ協奏曲が大好きで、わが家のCD棚には全5曲の名盤という名盤がズラリと並んでいる。数えてみたら演奏家の数にして20人、計30枚余。しかし、一人による全曲演奏集は意外に少ないし、リヒテルもアルゲリッチも「皇帝」を弾いていないのを残念に思っていた。

ところがこの全5曲を中村紘子さんが昨年6月、大友直人指揮・東京都交響楽団と1回の公演5時間余で全て弾いてのけたのだから、これには本当に驚いた。しかもその全てが珠玉のような演奏で、ソニーの大賀典雄相談役が、「紘子さんの数ある名演の中でも今回が最高」と絶賛されていたのが印象に残った。

この壮絶な全5曲公演が1日限りで終わってしまったのは誠にもったいない話で、その再現は改めて是非お願いしたいが、とりあえず今回はその中のさわりである第5番「皇帝」である。これをドレスデンの豊穣な響きをバックに弾いて下さるのだから、真に胸踊る名演となることは疑いない。

最近の中村紘子さんは益々、ヴィルトゥオーゾの本領を発揮し、フォルティッシモの音色の豊かさはかのリヒテルを彷彿とさせるほどである。デビュー50周年の来年を控え、この演奏会を機に一段と飛躍を遂げられることをお祈りしている。

SLUB
Wir führen Wissen.
Dresdner Philharmonie